

世界に通用する学生を育てる 世界遺産専攻開設と今後の戦略

日高健一郎

人間総合科学研究科教授

はじめに

2004年4月に本学修士課程芸術研究科に世界遺産専攻が新設され、21名の学生を迎えることができた。専攻の名称は、ユネスコが1972年に定めた「世界遺産条約（世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約）」に由来する。かけがえのない貴重な自然と文化を未来へ継承すべき遺産として保存するため、地球的規模での遺産保護へ向けた人材の育成が専攻設置の主旨であり、「世界に通用する」学生を育てることは、当然の要求となっている。果たしてこの使命に応えられるかどうか、関係の教員にとっては、責任と使命感を意識して数ヶ月の時間が経過した。私自身にとっても、専攻運営の責任者として、ようやく初年度の第一期が過ぎて、これからの方針や将来展望を考える余裕が出てきたところである。この専攻の今後、および「世界に通用する」教育をどう考えるかについて、私なりに身近

なところで現在の所感を以下の三点で述べてみたい。

課題と対策1

世界を「見る」、「知る」、「感じる」ことを教える

端末やメディアからは、日々さまざまな量の情報がもたらされ、簡単な操作で、われわれは世界のほとんどすべての現状を見ることができ、知ることができ、また時には感じることもできる。しかし、この仮想現実の「世界」と現実の「世界」の差、それら両者はまったく異なるという事実をどう教えるか、これは高度情報化社会で大学院教育を担当する教員の大きな課題であろうと私は考える。

対策は、きわめて単純な以下の二つであろう。第一は、いわゆる人材交流であり、講師の招聘ないし学生の派遣（留学）によって、仮想ではない世界の現実に学生を対面

させることである。この点で、大学の人材交流制度はさらに拡張・活性化されるべきである。言うまでもなく、ただ外国人であれば「世界」を教えられるわけではなく、高い水準にある「世界的な」教育者、研究者を招聘しなければ意味はない。教職員の海外派遣については、従来の褒賞的派遣ではなく、「世界」との交流を実現できる実力をもつ者の派遣を能力と将来性を第一基準として推進すべきである。授業の一環としての、海外インターン制度等も奨励されるべきである。世界遺産専攻では、インターン制度が必修で、海外の派遣先を希望する学生も多い。

第二は、ある意味でより簡単、ある意味でより困難な方法として、学生を教える教員自身が世界の現実の一コマになることである。国内にあって、世界の現実、より正確には世界水準の自らの現状を学生に提示することは、「世界に通用する」教員であれば、それほど難しいことではあるまい。世界に通用する学生を育てるためには、教員が世界に通用しなければならぬ、ということであろうか。

研究者であると同時に教育者である教員にとって、世界に通用する学生を育てるためには、研究と教育の両面で世界水準が求められることになろう。特に、世界水準の講義・指導を行う「講義力」とも言うべ

き能力は重要で、大学として、いかに教員の「講義力」を高めるかが大きな課題である。大学は、教員に語学力やプレゼンテーション能力、あるいは効果的な映像化手法といった授業スキルの向上を求めると同時に、それらの向上に対する教員が自身の自己投資を効果的に助成・奨励すべきである。

課題と対策2

大学の枠を越えた連携によって、世界に通用する学生を育てる

大学が「競争の時代」の中にあり、生き残りを賭けた自己改造の試練を受けていることは、改めて記すまでもない。文科省が進める拠点形成策の一つ、いわゆる「21世紀COE」による大学選別もこの流れを加速させている。しかし、この制度では、各大学は、提示するプログラムに関して自らを世界水準の「拠点」として証明しなければならないが、そこに国内外他大学・機関の力を借りることはできない。大学間の連携、あるいは関連組織を含む大学コンソーシアムによる申請は想定されていないのである。

文科省は当初から大学間連携を断ち切ることを前提として、この競争制度を導入したわけではないが、結果的に大学は、この制度に関する限り、「拠点」という看板を目指して互いに競争しこすすれ、協力し合うことはできない。しかし、この拠点構成構

想は、遅かれ早かれ、大学によるネットワークを対象とする「連携 COE」に発展するであろう。世界に通用する人材育成に向けて、総合大学とはいえ、本学のみがなし得ることには、やはり限界があり、教育陣、研究環境、学生相互の刺激等々にとって、大学の連携はきわめて重要である。加えて、外部資金の効果的導入を伴う連携はさらに好ましいことは改めて言うまでもない。形式は、COE とやや異なるかもしれないが、おそらくここ 1、2 年のうちに、「連携」と「国境を越えた教育交流」が大学院組織に大きなうねりを作り出すのではないだろうか。

地理的に近い組織の相互協力を想定した従来の「連携大学院」の枠を越えて、国外の大学、機関との連携も視野に入れた体制整備が、私ども世界遺産専攻にとっても急務であると考えている。本専攻に関しては、国内の文化財保護関連機関、遺産保護関係、特に保存・修復技術で教育実績をもつ大学、およびユネスコ関連の国際機関との連携実現が大きな課題である。修士課程一研究科の中の専攻という細分類に過ぎないが、研究科の枠を超えた世界水準の連携およびコンソーシアム形成がこれからの課題であり、その対策として、連携への機動的な準備を進めている。そこで展開される教育と研究が日本はもとより、アジアや世界の中でも注目される新機軸とならなければならない

ことは言うまでもないが、この内容については、機会を改めて述べることにしたい。世界遺産専攻は本学修士課程での設置が国内初となるが、これは何も本学が独占すべきブランドではない。国内外の関連組織と有機的連携を構築することによって、この国内初の世界遺産に関する専攻の意義はますます高まることが期待され、「戦略的国際連携支援」のモデル事業となることを目標にしている。国境を越えた教育の提供・交流は、今後の大学院教育で欠くことができない基本事項となるはずである。

課題と対策 3

「地球貢献」プロジェクトの構想が世界に通用する学生を育てる

国内の大学には「地域貢献」が求められているようで、そうした活動に適した学系や教育・研究分野では、積極的にプログラムが進められている。たいへん好ましいことだが、そうした地域貢献が「地域」を越えた普遍性をもつか否かは、世界を視野に入れる大学の教育的使命として重要な観点であろう。特に、地域貢献プロジェクトを推進することで、教員と所属組織が一時時代の流れに乗ったとして自己満足に陥る危険には注意が必要である。地域貢献は、理念、知識、手法、いずれにおいても地域を越えた領域、望むらくは「世界」へ拡大し

うる汎用性を備えていなければならない。

日本の大学全体における本学の位置づけを考えると、筆者は「地域貢献」の先に「地球貢献」への展望を期待したい。「世界に通用する」学生を育てるには、世界に貢献しうるプロジェクトが必要なのである。地域貢献に関して、「そうした活動に適した学系や教育・研究分野では」という限定句を先に記したが、「地球貢献」プロジェクトの場合は、本学すべての教員と組織が構想しうるであろう。この課題に対する対応は、唯一、大学当局による世界水準、世界的スケールのプロジェクト構想の奨励、助成、推進である。大学当局には、鋭い洞察力と将来展望をもって、学内から提示される地球的規模での構想を検討・選択し、必要な場合は、上記の「連携大学院」の開設を進め、政策的に関連省庁と連絡・調整を図るといった機動力が求められる。当然、大型の研究資金導入もそれに伴わなければならない。科研費取得のための研究会も大いに結構であるが、大学を取り巻く流れに合わせて対症療法的に「ぬるま湯体質」の尻をたたくと同時に、高位の行政官を説得できる構想を何本も提示することが本学執行部の責任になろう。地球的スケールのプロジェクトが本学を核として展開されることで、学生は必然的に世界水準の教育と研究を学び、修得することになろう。

世界遺産専攻では、トランス・バウンダリー・サイト（国境を越えた複数国にまたがる世界遺産）の推進者としての日本の遺産保護における役割に大いに注目している。わが町のこの史跡を、わが市のこの文化財を、わが県のこの自然を世界遺産に、という地域運動が各地で盛んな昨今であるが、ユネスコの大きな方針として、国境を越えた遺産指定が今後の大きな流れになると筆者は予想している。日本は隣国と地続きではないが、より広い視野に立てば、日本を東端とする仏教伝来の道のように、壮大な文化的脈絡の中で、アジア諸国とトランス・バウンダリー・サイトを共有しうるのであり、そうした広域遺産の評価、申請、保護、維持に日本が他国との協力によって基幹的役割を果たす意義は大きい。この構想はさておいて、学内には多くの世界的プロジェクトの芽が飛躍への機会を待っているはずであり、それを発掘し、奨励する関連部局（戦略推進室がこれにあたるのであろうか？）の手腕に大いに期待したい。

おわりに

勝手な所感を書き連ね、本学の現状や機構、あるいは中長期計画と矛盾したり、不整合となる点があったのではないかと懸念している。また、表現には、筆致の勢いで、傲慢な箇所が見られるかもしれない。時間

的制約もあり、拙稿の内容を十分に検討する余裕もないまま提出することとなった。不適切な点については、ご叱正を受けて、訂正すべきは訂正し、筆者自身の今後の活動に反映させたい。学生は、われわれ教員の意欲と才能にきわめて敏感である。それが、教室の中だけで通用するのか、国内だけで通用するのか、あるいは世界に向けて広く通用するのか、彼らは本能的に感じとり、それを自らの基盤として外界へ果立ってゆく。従って、繰り返しになるが「世界に通用する」学生を育成するためには、まず、教員が「世界に通用」しなければならない。

最後に、これまでとやや異質な、しかし勝るとも劣らず重要な指摘を一つ付け加えることを許していただきたい。「世界に通用する」学生を育成するためには、教育の「場」が「世界に通用」しなければならない。設備、規模、面積など、各種の規定や基準等々があろうかと思うが、本学の学生関連福利厚生設備の老朽化は顕著で、明らかに世界水準からは遠く離れている。留学生をして、「日本にもこれほどまでに汚い住居があったのか！」と愕然とさせる学生寮、裸のままシャワーの順番待ちをしなければならない付属浴室など、「世界水準」の（あるいは、それを目指す）教育や研究指導を受けた後に待っている余暇設備と福利厚生

は、本学の場合あまりにも劣悪である。さらに、直接教育効果に大きく影響する教育設備の貧弱さも、一部で目を覆うばかりである。リニューアルと称して外観を安易に整えるのではなく、真に勉学の意欲に燃える学生がそのうわべの繕いではなく、講義室の内と外に何を求めているかというニーズの把握は重要かつ緊急である。総合的に見て、これだけ広い敷地を有しながら施設の貧困に悩む本学の場合、大学施設としての各種の基準、学内のゾーニング構想など、これまでのキャンパス計画の基本路線をそろそろ見直し、既存設備の効果的再活用・修復に着手すべき時期に来ているのかもしれない。真摯な学生への「心のこもったもてなし」は、教育効果を倍増させる。講義や演習に集中できる地味ではあるが快適な設備、それを終えて疲れた頭脳と身体をゆっくりと休め、明日への活力を生むような設備を早急に整備しなければ、それこそ「世界水準」は教員側の自己満足に留まり、学生が自ら示す成果として現実化しないであろう。

(ひだか けんいちろう/世界遺産)